

テクノの未来を考えるニュースレター

Vol.

7

テクノの
未来を
考える

2026年10月

みんなで出し合った 意見をご紹介します!

現在、播磨科学公園都市の新たなあり方について、「まちづくりチーム」「都市フレームチーム」「イノベーションチーム」の3つのチームに分かれて検討を進めています。

令和8年9月29日には、「イノベーションチーム」のチーム会議を開催しました。主なご意見は裏面に掲載していますので、ぜひご覧ください。

今後も3つのチーム会議の開催状況や意見交換の内容については、「チーム会議ニュース」として引き続きお知らせしていきます。

チーム会議 開催概要【イノベーションチーム(第3回)】

■日 時:令和8年9月29日(火曜日)

13時00分～14時30分

■場 所:光都プラザ cotohana (+ Web)

■出席者数:13名(有識者2名、行政職員11名)

■プログラム内容:

1.開会

2.概要説明

3.協議

・これまでの議論を踏まえた取組体系(全体の枠組み)について

・テクノにおけるイノベーションについて深掘り

4.閉会

・これまでの議論を踏まえた取組体系(全体の枠組み)について、事務局から説明を行った後、検討項目の過不足や内容の妥当性について意見交換を行いました。

・また、テクノにおけるイノベーションの推進に向けた取組内容の確認を行い、今後の議論の方向性について整理しました。

【イノベーションチームの主な論点】(令和7年度第3回あり方協議会資料より)

カテゴリー	主な論点
科学技術 ・産業振興	● 立地の優位性等を活かした企業誘致 ● 研究成果の社会実装・地域還元(起業、試作・実証フィールド等) ● 産学官民の連携促進 ● 研究者の滞在環境整備 ● 人材循環の仕組み 等
その他	● 播磨科学公園都市ならではの会議・イベント・ツーリズム等の開催・定着 ● 科学技術を核にしたオープンで国際的な都市イメージ・ブランドの構築 ● まちびらき30周年を区切りとしたレガシーの形成 ● 多自然地域の今後のくらしと産業のあり方



テクノがわかる! 地域メディア「テクノ界限」

播磨科学公園都市では、地域のイベントや暮らしに役立つ情報などを発信する「テクノ界限」という取組が行われています。地域の身近な話題やまちの魅力を紹介し、住民の暮らしを支えるとともに、テクノのことをもっと知ってもらうきっかけにもなっています。

播磨科学公園都市には、研究施設や企業、豊かな自然など、様々な魅力があります。こうした魅力をより多くの人に知ってもらうためには、地域に暮らす人だけでなく、研究者や企業、まちを訪れる人など、幅広い人たちに情報を届けていくことも大切です。

今後は、「テクノ界限」のような既存の取組を生かしながら、誰に、何を伝えたいのかを考え、発信する情報や伝え方を工夫していくことで、テクノの魅力がさらに広まり、新たな出会いや交流につながっていくことが期待されます。



チーム会議の様子

主な意見



その他、全ての意見
はこちら！



参加者

- 個別の取組をカテゴライズするだけでなく、錦の御旗となるような共通の目標・方向性を設定し、各取組をその下に位置付けていく必要がある
- SPring-8等の先端研究から地域へ何かが波及するまちを目指すのか、ドローンやオンライン診療等の新技術を積極的に導入するまちを目指すのか、まずはイノベーションチームの参加者間でイメージを共有する必要がある
- 市町や県が既に行っている取組と重複する場合は、別々に進めるのではなく連携する視点が重要であり、県のドローンプラットフォーム等との接続も考えられる
- テーマを広く並べるだけでなく、どこに重点を置き、どの主体・資源で動かすのかを絞り込まなければ、企業等にも声をかけにくい
- 実証実験や企業連携を進めるには、県・市町・住民を巻き込み、企業への営業や調整を担う窓口組織と専門的な人材が必要である
- ネットワークの拡充については、既存のまちづくり協議会等のネットワークを生かしつつ、住民が参加・対話しやすい形にしていくことも考えられる
- 大学生による地域研究や建築・都市空間への関心を入口として、大学との広域的な連携を進める余地がある
- テクノを知ってもらうため、更新されたマップや、注目が集まった際にすぐ提示できる情報、必要に応じたマスメディアの活用が求められる



有識者（コーディネーター）

- 最先端の科学技術から展開する「川上」と、新しい技術を実生活・住生活に落とし込む「川下」の両方向からイノベーションを捉え、取組体系を組み直していくことが考えられる
- 30周年を単なるイベントではなく、播磨科学公園都市を再起動する機会として捉え、住民による取組だけでなく、行政や企業による投資を伴う象徴的な取組を示すことが求められる
- SPring-8を直接利用することだけでなく、アカデミアやテクノロジーの雰囲気、設備更新のプロセス、周辺の空間・建築・イベント等を「最先端科学の文化」として見せることも地域との接点になり得る
- 高度外国人材の受入れでは、研究者本人だけでなく家族も含め、住宅、教育、生活環境等を整える必要があり、市町の役割も大きい
- 若者や学生の自由な発想を起点にし、大人がそれを支えることで、失敗を恐れず挑戦できる雰囲気をつくることが重要
- 最先端科学に市民が関わり理解する「市民科学」、「科学の民主化」という視点や、科学を分かりやすく伝え、市民を巻き込む伝道師のような人材を推進組織に位置付ける考え方が必要である

**チーム会議では、テクノの未来に向けて様々な意見交換を行っています。
今後も議論を深めながら、テクノの未来を一緒に考えていきましょう！**



播磨科学公園都市の新たなあり方 検討協議会マネジメント会議

【事務局】兵庫県企業庁 地域整備振興課

【電話番号】078-362-3850

【E-mail】chiikiseibi@pref.hyogo.lg.jp

テクノのあり方検討
についての詳細情
報はこちらをご覧
ください
(兵庫県企業庁HP)

